

沖田 実 (編)

関節可動域制限 第2版 —病態の理解と治療の考え方

吉 川 法 生

(旭川医科大学病院, 作業療法士)



私事ではあるが、昨年の4月に15年続けた大学教員を辞め臨床に戻った。理由はいろいろあったが、一つはOTの臨床教育の変革をしたいことであった。現在の臨床教育は学生にも臨床指導者にも過大な負担を強いるものであり、養成校の責任が曖昧になっている。教員側という一方的な立場からではなく、臨床指導者側からも臨床実習をよりよいものにしていくことが必要かと思っていた。また、15年臨床から離れて、学生に今の作業療法の現状をはたして伝えきれているかという不安もあった。今の作業療法教育では教員が臨床場面に出ていることが少ない。何十年も前の体験で学生に現状を指導できているか、一度振り返る機会が必要だと思った。

もう一つ、自分の研究能力の限界を感じたことも要因であった。その限界を感じさせたのは、他ならぬ本書の著者である沖田 実先生である。彼とは星城大学で研究室が隣であり、お互いに単身赴任という身であったためよく酒を酌み交わして作業療法、理学療法の現状と将来について語り合った。それぞれ専門の違いはあったものの、考え方の基本はおおむね一致していたため、学生や若い人にこの思いをどう伝えていくか等についても話をした。

彼はそれを、研究を通して伝えるという手段で行っていた。毎日大学の動物実験施設で、人知れな

い時間に実験の様子を確認して、そして結果を創っていた。その結果の集大成がこの「関節可動域制限 第2版—病態の理解と治療の考え方」であり、日々の研究の継続と努力が今回早い段階での第2版を生んだのだと思う。当院のリハ医からも、この領域の研究では他に類をあまり見ないと評価されている研究である。

前半でまず関節の構造と機能を丁寧に説明し、皮膚、骨格筋、靱帯、関節包と滑液、関節軟骨と整理しながら読者に理解を促す。ここでの理解が、次に続く拘縮の病態と発生メカニズムの理解に影響する。私も養成校を卒業して26年、あらためて整理された体系を学ぶことの意義が感じられた。そこから、関節の不動が約1カ月続くと変化が起き、拘縮へと進んでいくことがわかった。そして最後の章で関節可動域の治療に関する挑戦を、豊富な自験例を含めて提言している。

私は現在大学病院におり、急性期といわれる状態に関わることが多いが、この期間に関節の不動状態を少なくすることが、将来の運動機能にいかんが大切かが今あらためて理解できた。大学教員時代の私の専門は地域がフィールドであったが、そこでも数多くの、長期間にわたって関節可動域制限のある人を見てきた。そのときは、もう仕方がないものとあきらめてしまっていたものであった。しか

し早期から適切な治療が行われればその後の生活行動への影響を少なくできるというデータがあることは、作業療法のような生活場面に働きかける職種にとっても大きな関心をもたねばなるまい。作業療法では機能障害に関与する意義が弱いと主張する向きも少なくないが、機能があつての生活であり、協働によりチームで役割を分担するとしても、その理解をする努力を怠る理由はない。私もそうした主張が誤っていることを、彼との飲む機会や、この本を手にとることによって再認識している。

彼の意志の強さや、それを成し遂げようという気持ちの表れをもう一つ挙げるとするならば、彼は人を大切に、特に若い人の育成を視野に入れて活動しているということである。彼は研究をチームで行い、その中に若い年代の者を積極的に登用している。よく、OTとPTは理解しにくく協力しないと揶揄されていたが、しっかりと共通基盤をもてば、何の問題もない。これからのリハは多職種が協力してチームで行わなければならない。そのためにもこの本はぜひ機能障害を苦手とするOTに読んでもらい、それぞれの専門性を共通認識できるような環境づくりをしてほしいものである。

〔A5判 240頁 3,200円+税〕
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357